

2つの村があった。ひとつの村にはとても美しい娘たちが住んでいて、そのひとりがジムラジャマリだった。彼女には男の友人しかおらず、カードをやったり、男のようにサッカーをしたりしていた。このように男たちと付き合い合っていたことで彼女のイメージは悪くなってしまった。ジムラジャマリ以外の女の友人たちは、大人になって結婚して子供を生んだ。このことが彼女の母親をとっても心配させ、母親は絶望していた。

或る日、若い船乗りの男が村に現れた。彼は結婚相手を探していた。彼が金持ちであるとわかっていたので、母親の誰もが自分たちの娘を彼と結婚させようと望んだが無駄だった。或る時、彼はジムラジャマリを見かけ、彼の心はとてもどきどきした。彼はすぐに公共の広場に行って町の名士たちに、理想の女性を見つけたと知らせた。皆は喜んで、それが自分の娘であることを期待した。彼は言った。

「その娘は鳥打帽を被ってズボンを穿いている子です」。

「何と云うことだ[subhanallah = 神に栄光あれ]、それは村の娼婦だ！ あの娘とは結婚なんて出来やしない。あの娘はふしだらな女だ」。

「彼女がどうであれ、そんなこと気にしません！ 僕の心は彼女を愛しているので、彼女と結婚したいのです」。

名士たちは彼に思いとどませようとして言った。

「彼女は麻薬をやっているし、公共の場を男みたいにうろつき、どんな男とでも寝るのだ」。

しかし、それでも彼は諦めなかった。村の人々は船乗りの選択に驚いた。彼は、村の美しい娘たちの中からジムラジャマリを選んだのだ。

彼らは船乗りを、結婚の申し込みのために、ジムラジャマリの母親の家に連れて行った。母親は、娘が結婚するのを見られないことを死ぬほど悲しんでいた。ジムラジャマリはひとり娘だった。母親は来客を招き入れ、彼らが船乗りの申し込みを話すと、驚いて言った。

「あなたが私の娘を望むなんてあり得ません。他の娘を見たのに違いありません。人違いしたのでしょう」。

若者は答えた。

「私は彼女の名前を知りませんが、彼女は鳥打帽を被ってズボンを穿いていました」。

「それはあの娘ですが、選んだというのは確かですか？ 私の娘は家に寄り付かず、寝ることもありません。公共の広場で男たちとうろついています」。

「そうです。確かに私は選びました」。

「アッラーの御名において[bismillah]、そういうことならば」。

婚約が行われたが、皆は、ジムラジャマリが処女ではないと思って心配した。婚礼の夜、夫が彼女を愛撫しようとした時彼女は言った。

「私が公共の広場でヤク中たちとうろついていたのは事実ですが、誰とも関係したことはありません。あなたが、私が寝る最初の男の人です」。

夫は非常に驚いたが、彼女が真実を語っていることを確かめることが出来た。夫はジムラジャマリの母親に会いに行き話した。

「あなたは自分の娘が娼婦だと言いました！ しかし、すべての娼婦が彼女のようにありますように。何故なら彼女は処女でした。あなたはそれがわかるでしょう」。

若者は、金貨とダイヤモンドで一杯のトランクを持っていたが、彼は喜びの余り、それを妻に贈った。村中がびっくりして、その知らせに驚きがおさまらなかった。

時が経って、ジムラジャマリは身ごもった。村のひとりの女性がお祝いを催した。女たちは、彼女らの夫が婚礼の夜に贈ったものについて話をしていた。ジムアジャマリの番になると彼女は言った。

「私は、夫が私にしてくれたことのすべてなんて言えません」。

集まりにいた、他の女性の番になったが、彼女は黙っていた。娘たちの話を聞いていた母親たちはハディジャの沈黙に驚いた。彼女たちは質問をし合い、ハディジャの沈黙を巡ってざわめきが起こり始めた。彼女の母親が問い質したが、彼女は黙り通した。母親はなおも問うと彼女は言った。「私は処女ではありませんでした。それで夫は私に何もくれませんでした」。

ジムジャマリの母親のような親は称えられますように。我々皆が彼女のことを誇ったけれど、彼女こそ正しい娘だった。